

論文要約

日本の近代語研究では、明治期に日本語の語彙は大きく変容し、語種の面では漢語、品詞の面では名詞と形容動詞が著しく増えたことが一般的な認識である。それら急増した語彙については、これまで様々な視点から研究がなされてきた。しかし、主として次のような問題点があげられる。1、学術用語を中心とする名詞に焦点が当てられ、形容動詞や動詞などの叙述語に関するものは少ない。2、漢語形容動詞について、若干の語に対する語誌記述や、語彙の定着と形成の視点より進めたものはあるが、体系的な研究は行われていない。1については、近代語の全体像を明らかにするためには、語彙全般の解明が必要で、形容動詞などに対する研究が不可欠である。2については、明治期において名詞に次いで急増した漢語形容動詞がどれ程あるのか、どのような語なのかといった基本的な問題さえ明らかにされていないのが現状で、そのような問題を早急に解決する必要性が感じられる。したがって、本稿は、近代の漢語形容動詞を対象とし、語彙体系の近代化という視点から、その発生・発達、及び漢字文化圏での還流現象を解明し、漢語形容動詞の全体像を把握しようとするものである。

本稿は、序章と終章を含め、全8章で構成されている。以下、各章の内容を略述する。

序章では、本論文と最も関連性の高い「近代日本語の中の漢語」「日中語彙交流」と「漢語形容動詞」に関する先行研究を整理し、その成果を述べたうえで問題点を指摘する。続いて、本研究の位置付けを明確にし、研究課題及び研究目的と、それに対する研究方法を述べ、論文の構成を提示する。

第二章では、「形容動詞の概観」について述べる。まず、形容動詞の史的変遷をたどる。ここでは、形容動詞の発生及びその品詞名の成立過程を紹介し、上代から近現代までの形容詞と形容動詞の数、その中の漢語と和語の数の変化などを調査した結果を述べる。この調査にあたり、筆者自身の形容動詞の収集方法を紹介

し、形容動詞の全数を統計し、リストアップする。さらに、その中の漢語形容動詞に重点を置き、文字数や接辞の有無などによって分類し、分析を行う。

第三章では、「明治期における漢語形容動詞」について述べる。漢語形容動詞の中から語形と語義のいずれかで近代に生じたものを抽出し、いわゆる近代の漢語形容動詞の数とその内訳を明らかにする。それに基づいて、文字数と日中同形であるかどうか、漢籍からの出典の有無などにより再分類する。また、最も常用と判断する日中同形の二字漢語形容動詞 44 語を日中両言語における初出とその近代における使用例、また、使用頻度の変化などの面から考察し、その語誌及び日中の語彙交流を明らかにする。最後に、これまでの考察結果により、明治期における日中同形の二字漢語形容動詞を「漢籍語」、「和製漢語」、「不明」の三種類に分け、「漢籍語」をさらに「継承語」と「新義語」に分類する。

第四章では「漢籍語」の中の「継承語」に関して述べるが、ここでは主に「重要」を例として論じる。「重要」という語は中国の漢籍に由来し、その意味が漢籍とほぼ一致したまま近代まで継承され、日本語にも同義で借用された語である。日本語の「重要」は、幕末の蘭学訳書に初出が確認され、明治初期に中村正直の名著『西国立志編』に使用された。その由来は、新教宣教師メドハーストやロブシャイドによる英華辞書の影響だと推測する。19世紀末から20世紀の初頭ごろ、「重要」の日本語での使用が中国よりも先に普及し、その後中国語に逆流入した。一方、中国語における「重要」は、その発生から近代まで使われてはいたが、使用頻度が低く、語としての身分はメドハーストの *English and Chinese Dictionary* (1847-48) やロブシャイドの『英華字典』(1866-69) に訳語とされた。20世紀初頭から日本語からの強い影響を受け、「重要」が一気に常用語となり、現在に至る。

第五章では「漢籍語」の中の「新義語」に関して述べるが、ここでは主に「偉大」を例として論じる。「偉大」は中国の漢籍に由来するが、近代に新義が生じ、それ以降日中両言語にほぼ新義

のみで使用されている語の代表として考察する。19世紀までの中国語において、「偉大」は「体が大きい」という意味で使用されてきた。しかし、日本に伝わった後、漢籍の意味も使用されていたが、明治初期に抽象的な事柄を修飾するようになり、新義が生じた。両義が一定期間の併用を経て、19世紀末にはほぼ新義のみの使用となり、辞書にも広く収録され、次第に定着した。その新義もまた20世紀初頭における中国への日本語流入の風潮に従い、中国語に定着し、普及した。このように、「偉大」の由来は中国であるが、新義は日本で発生したもので、中国への逆流入によって、中→日→中という語彙交流の環流が見られた。

第六章では「和製漢語」に関して述べるが、ここでは主に「正確」を例として論じる。「正確」は江戸時代に発生した「和製漢語」で、後に中国にも伝わった語の代表として考察するが、江戸後期の『国史略』に初出が見られ、蘭学の著書にも数例確認できた。明治に入ってから、意味と用法、表記にゆれがあったが、「正しく確か」という意味で次第に定着し、明治30年代には小説にも使われるようになり、辞書にも広く収録された。一方、中国語においては、今まで使用例が見当たらなかった「正確」が1900年前後に『清議報』『新民叢報』などの日本で創刊された出版物に初めて出現し、また日本の書籍や記事の中国語訳にもしばしば姿を現すようになった。その後、使用頻度が急増し、短い期間で定着した。早期使用例や時代の背景から見て、日本からの借用語だと推測する。

第七章でも「和製漢語」に関して述べるが、ここでは主に「優秀」を例として論じる。「優秀」は明治期に発生した「和製漢語」で、後に中国にも伝わった語の代表として考察する。「優秀」は調べた限りの初出が1886年で、歴史は浅いが、短い期間で普及に至った語である。中国語においては、「正確」と同じく、日本で創刊された中国刊行物や日本に関する記事などに初めて見られ、日本からの借用語だと考えられる。しかし、中国語に伝わった後、意味では日本語とほぼ一致しているが、用法では「人間活

動の主体」領域の語の修飾に集中し、日本語のように「人間活動」や「生産物及び用具」に属する語を修飾する用法ではあまり用いられない。また、＜優秀＞という概念を表す日中の類語群も考察し、同概念を表現するには、日本語に「ひいでる」「優秀」など和漢相応のものがあるのに対し、中国語には 19 世紀半ばごろの一字漢語より「優秀」「優美」「傑出」「卓越」など二字漢語へと発展していったことがわかる。

最後の「終章」では、本論文の考察を踏まえ、近代における漢語形容動詞の発達の原因や、その特徴などを検討する。さらに、本課題の意義及び今後の課題について論じる。

以上、各章に示したように、本稿では近代の漢語形容動詞を整理・分類し、その由来を検討する。それに基づき、常用日中同形二字語を詳しく考察し、それらの語誌を明らかにする。こういった考察により、近代における漢語形容動詞を体系的に捉えることができる。また、最も代表的な日中同形の漢語形容動詞 4 語を詳細に検討することにより、各パターンの語の発生・発達の過程や、日中語彙交流の史実、類語群の構成と新陳代謝なども解明する。さらに、考察の結果より、新形容動詞発生の原因やその一群の語彙の特徴なども窺うことができる。このように、漢語形容動詞の全体像を把握することによって、日本の近代語語彙研究だけでなく、中国語の近代語研究にも寄与すると考えられる。